Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-01-02

丹波市春日町棚原地区・丹波市教育委員会との連携事業（第2章自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業）

松下，正和
大国，正美

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,5(平成18年度事業報告書):69-75

(Issue Date)
2007-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002254

丹波市春日町棚原地区・丹波市教育委員会との連携事業

平成17（2005）年度に引き続き、今年度も棚原区パワーアップ事業推進委員会や丹波市教育委員会と連携し、地区の古文書調査、古文書を読む会、元禄の絵図を活用したウォーキングラリーなどを実施した。

また、兵庫県立考古博物館の先行ソフト事業である地域文化財展に、これまでの調査成果を展示することができ、地域住民による手作りの展示を春日歴史民俗資料館にておこなうことができた。以下、概要を報告する。

棚原区パワーアップ事業推進委員会と文学部地域連携センターとの出会い

同委員会は、地域の神社や祠、寺院、古文書などの地域歴史遺産を保護・継承して後世に伝え、まちづくりをおこなっていくこと目的に地域住民が結成したものである（現在13名）。2004年度には地区内の歴遺産を紹介した『棚原見てある記』の刊行、05年度には『棚原見てある記』掲載史跡のうち11か所に看板を設置するなど熱心な活動をすでにおこなっていた。

文学部地域連携センターのメンバー3名（坂江渉・木村修二・松下正和）は、2005年11月に丹波市教育委員会を訪問し、2004年の風水害による被災資料調査を行った。その後、教育委員会の紹介のもと、センターの存在を知った委員会のメンバーが直接来学され、地区内の古文書の解読や歴史遺産の活用事業への協力を表明された。以後、地区の庚申堂に保管されている区有文書の調査や整理作業を委員会メンバーや丹波市教委と共同ですすめている（なお、昨年度の活動については、『平成17年度「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等の連携事業」報告書』大国正美報告を参照）

・第1回調査（2006年2月8日）
・第2回調査（2006年3月13日）
・第3回調査（2006年4月23日）
・第4回調査、第1回古文書を読む会（2006年7月30日）…大国正美氏が講師
・第5回調査（2006年10月5日）
・第6回調査（2006年11月11日）
・ウォークラリー、第2回古文書を読む会（2006年11月12日）…河野未央氏が講師
・第7回調査（2007年3月4・5日）
・第3回古文書を読む会（2007年3月4日）…大国正美氏が講師

（今年度の調査と読む会についての詳細は、72頁以下の大国報告を参照のこと）

▲「第2回古文書を読む会」での講演＝河野未央氏（11/12）

地域文化財展

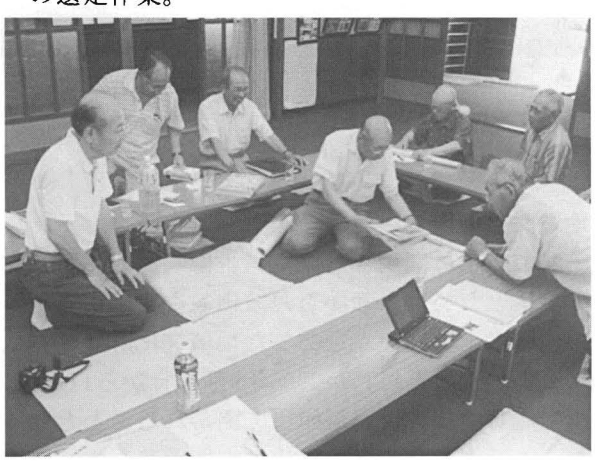
2007年秋に開館する県立考古博物館の先行ソフト事業として、県教委と丹波市教委主催による、古代の氷上郡に焦点をあてた地域文化財展「古代氷上郡の役所と村」が2006年9月16日から11月5日まで春日歴史民俗資料館にて開かれることとなった。この展示会では、古代の官衙遺跡を中心に遺物が展示され、棚原地区にある8世紀前半の山垣遺跡もその対象となった。同遺跡は、周囲を堀で囲んだ南北40mほどの敷地内に掘立柱建物や柵が設置されている。堀からは郡衙から下級の役所に差し出した郡符木簡や、丹波国氷上郡衙宛に届けられた封緘木簡、「春部里長」と墨で書かれた墨書土器などが出土したことから、山垣遺跡は、氷上郡の役所に関連する遺跡として注目を浴びてい

る。

先述のように、神戸大学文学部地域連携センターは、棚原区パワーアップ事業推進委員会・丹波市教育委員会と共同で地区内の古文書整理を行ってきたが、その際に「山垣」に関する歴史資料や遺物などが何点か残されていることが明らかとなった。そこで急遽、県教委と市教委に連絡・協議をおこない、展示会に対してセンターが共催、委員会が協力することとなった。

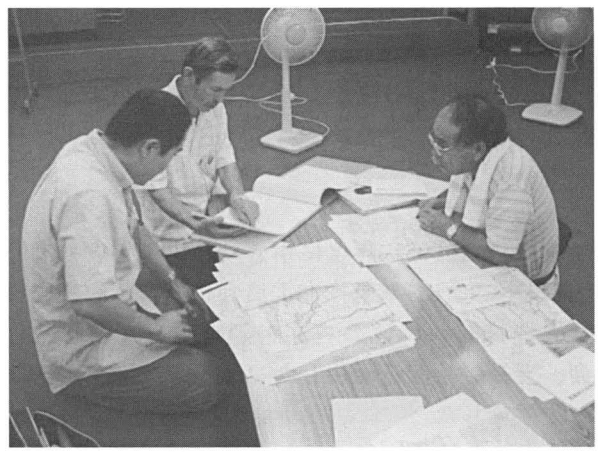
複数の遺構面が検出される場合、一般に遺跡は時代ごとの人々の生活やさまざまな活動の跡を示してくれる。また、時代により遺跡自体の利用のされ方や人の関与の仕方も異なってくる。このような視点から、地域文化財展のエピローグとして、山垣遺跡や山垣の地をめぐって、地元の人々が見いだした歴史資料を中心に展示するコーナーを設けることを県教委・市教委に提案し、快く承諾していただいた。近世から現代に至る「山垣」の地をめぐる古文書や絵図、古写真、表面採集遺物を展示し、地域社会の中での山垣遺跡のあり方をながめることができるように工夫した。

・2006年8月3日…共催に向けて考古博準備室を訪問、打合（坂江・松下）
・2006年8月5日…棚原区有文書内の調査。展示品の選定作業。



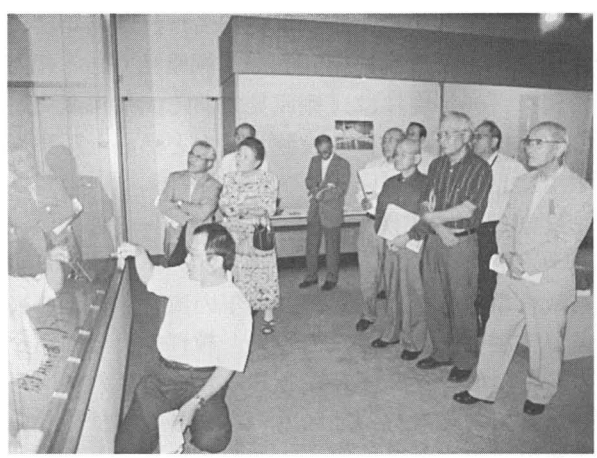
▲調査中の委員会メンバー（8/5）

・2006年8月21日…棚原区内の史跡巡見（坂江・松下）
・2006年8月31日…元禄の山論立会絵図にみえるスポットの巡見、委員会メンバーからの聞き取り調査（坂江・松下）



▲委員会メンバーからの聞き取り調査（8/31）

・2006年9月4日…市教委とともに国領地区（絵図中にみえる長谷村に相当）の区長に挨拶（坂江・松下）
・2006年9月14日…県教委、市教委とともに展示品搬入作業（坂江・松下）
・2006年9月16日…開会式。センターから坂江・松下が参加。
・2006年9月23日…平川南氏の講演会「木簡から見た古代の氷上」への参加（松下）

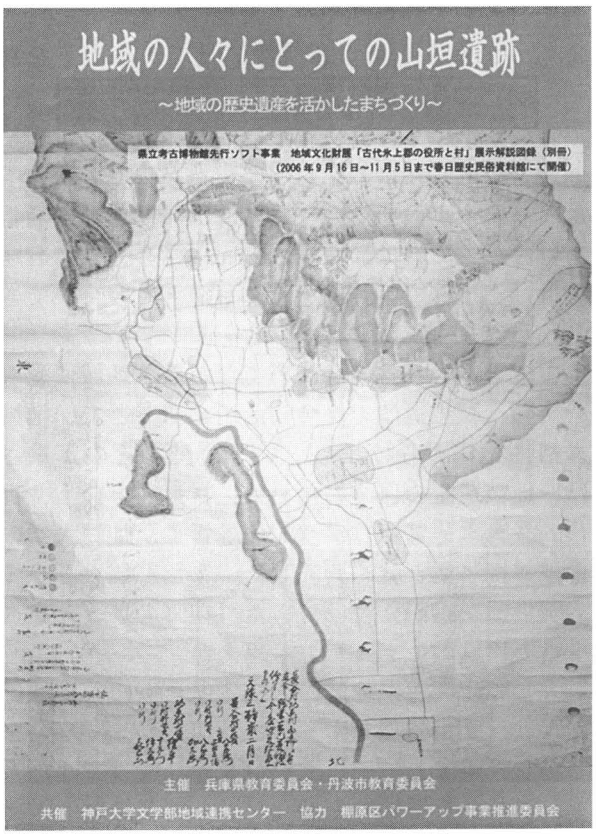


▲観客に展示説明を行う坂江渉氏（9/16）

共催が決定した直後から、山垣遺跡に関連する資料の共同調査や、地区内の遺物・史跡・景観をめぐる聞き取り調査・巡見などで、パワーアップ事業推進委員会の皆様にご協力をいただいた。展示コーナーに委員会作成の歴史景観マップ「歩こう元禄の絵図　知ろうふるさとの今昔」と解説文も提供していただいた。同委員会のメンバーである上田脩・三宅敏男両氏は、展示パネルの作成までお手伝いいただくなど、地元住民の熱心な参加と惜しみない協力を賜った。行政所蔵の遺物展示

や解説だけではなく、地域住民とともにつくりあげてきた展示パネルや地域住民が見いだした歴史資料を地元の資料館で展示することができた点は、地域遺産を身近なものとして感じていただけたのではないだろうか。作成した会期中の入場者数は1063名と多くの方々にご覧いただいた。

展示準備と平行して、図録も作成した。県教委・市教委作成分のパンフ1ページ分をいただき、「エピローグ　地域の歴史遺産を活かした町づくり（地域の人々にとっての山垣遺跡）」と題し、展示説明をおこなった。さらには、委員会と我々の調査結果を別冊図録としてまとめようという気運も高まり、展示解説図録（別冊）として『地域の人々にとっての山垣遺跡』をセンター編で作成することができた。詳細は参考資料をご覧いただきたい。



なお、この別冊図録は委員会によって棚原地区全戸に配布された（巻末に参考資料として収載）。

また、地域文化財展にて作成された展示パネルや別冊図録は、2006年11月に開催された地区の秋祭り「棚原文化祭」でのウォークラリーでも活用され、展示に利用された。ただ、展示会に地元の小・中学校の生徒さんに授業の一環として見学してもらえなかったこと、ウォークラリーに地区の生徒に参加してもらえなかった点は今後の課題として残された。この点にかかわって、2007年3月5日に、委員会メンバーと我々は、棚原地区の小学校である進修小学校の三崎典子校長と会合をもち、棚原区での試みを視察に来ていただき意見を求めた。同小学校では3年から6年の地域学習の成果発表の機会（11月開催の「ふれあい発表会」）を設けており、多くの保護者が聴衆として参加するという。

３年生から「みつお」学習が入ります。三尾山、流泉寺、天満宮の調査結果を発表しました。４年生は、校歌にも入っている長谷大池のことを地域の方々に教えていただきながら劇にして発表しました。５年生は、道徳の時間に学習した「町の石碑」から発展した先人の苦労を衣装もそろえた劇にして発表しました。最高学年の６年生は、「進修にも戦争があった」というテーマで資料館の見学や地域の方への聞き取り調査などを行った結果をまとめ上げて、悲惨な戦争を二度と起こしたくないという願いを発表しました。（平成18年11月21日号「進修幼・小学校園だより」より）

▲「棚原文化祭」にて展示パネルを解説する委員会メンバー（11/12）

このような既存の企画と連携しながら、この発表会の成果を春日民俗歴史資料館で展示するなど、小野市の事例を参考としながら、次世代に歴史文化への興味関心をさらに引き継ぐ方策がないか、地元の皆さんと今後も考えていきたい。

また、先述の第7回古文書調査の際には、朝来

市生野町の古文書を読む会のメンバー11名が活動の視察に訪れ、棚原区パワーアップ事業推進委員会の上田脩氏やセンターのメンバーと意見交換会をもった。このように、大学と各地が一対一で対応する「地域連携」のあり方を超えて、さらに地域同士が横につながり、互いに情報交換しあう「地域連携」が芽生えつつあることを実感した。なお、このような地域同士のつながりが持つ意味については、本報告書第２章の「朝来市生野町との連携事業」の項に詳しいので、参照されたい。

今後の連携事業「丹波市寺社建造物等調査」

丹波市教育委員会は、2007年度より市内の寺社建造物と古文書などの文化財悉皆調査を予定している。2007年1月31日、丹波市教育委員会の徳原多喜雄・高雄由紀子両氏から文学部地域連携センターに委託の打診があり、予算が正式に計上され次第、古文書調査についての協力関係を検討することとなった。初年度の調査は山南町から開始する予定で、一年で一町を調査するというペースで進めていくとのことであった。ただ悉皆調査を行うのに一年一町というのは期間が短すぎるため、調査に工夫が必要となろう。その点も今後の課題である。

また、これと平行して神戸大学と丹波市との協定締結に向けても進めていく方針が確認された。このように棚原区との連携を中心として、さらに丹波市全域の古文書調査に向けて事業が展開しつつある。丹波市は旧氷上郡6町が合併してできた市である。このような広域合併により誕生した自治体では、一般に新市や基礎コミュニティーのいずれにもふさわしい、地域の歴史文化を発展継承させることは困難とされている。しかし、丹波市では棚原地区のように、地域の歴史文化を探求する熱心なグループが他にもあるという。棚原のような先進的な事例をモデルにしつつ、大合併に対応した自治体の博物館・資料館・公民館などやコミュニティーのリーダー及び大学が継続的に連携することで、センターでは地域の歴史文化を活用しうる人やネットワークづくりを行いながら、地域文化の活性化をはかる方策を今後も検討していきたいと考えている。

（文責・松下正和）

棚原地区の古文書の整理について

「史料整理は史料散逸の始まり」への反省

丹波市春日町棚原地区の天満神社の庚申堂に保存されていた古文書は、1913（大正2）年に、当時の旧国領村村長だった上田捨蔵氏が調査して目録を作った。さらに1916年にそのうち重要と考えた庄屋文書を２巻に、さらに天満神社の由緒に関わるものを１巻にまとめ、ほかに天満神社の縁起も巻子本にして保存に取り組んでいた。しかし、目録は、番号のない箇条書きで点数も少なく、史料目録と呼べるようなものではなかった。2004年度から活動を始めた棚原区パワーアップ事業推進委員会（以下、パワーアップと略称）は、地域の歴史遺産を、わかりやすく後世に伝えることで、まちづくりをしようと『棚原見てある記』を発刊。続いて丹波市教育委員会や文化財審議委員の協力で独自に文書の再調査に取り組んだ。上田捨蔵氏の作成した目録をもとに史料が現存しているかどうかの点検を行い、目録には89番までの通番を付けた。史料は酸性紙の封筒に詰め、表に表題を付けただけで番号はなく、目録との照合ができない形になっていた。

古文書に触れるのは初めてながら、地域に愛着を持ち、歴史遺産を保全し活用することで、地域の活性化につなげようという姿勢。その真摯さは、地域遺産の保全のための人材育成という、現代的教育ニーズプログラムの趣旨や、神戸大学の地域連携事業と強く共鳴した。また私個人としても震災前から訴え続けてきた「在野のアーキビスト」の格好のモデルだとも思えた。

大学の研究者が地域の研究者とともに、地域に出かけ、文書整理をすることは何も珍しくない。しかし、得てしてそこで史料を守り続けてきた人々、これから地域で生活しながら守り続ける人々の位置づけがあまりに希薄だったのではないか。調査対象の史料群が、どういう構造から成り立ち、なぜそういう方法で整理し保存されているのか、今後の利用に何を配慮する必要があるのか。こうした基本がこれから史料を地域の中で守り続ける人々に伝わらなければ、史料は長く保全されないのではないか。ましてや目録が作成され外部からのアクセスが可能になることは、利用の開始

と同時に散逸の始まりになることもしばしば経験することである。最悪の場合は古書市場に流通しやすいものだけが分割され、抜き取られるということも起こってくる。これらは目録作成後に史料を守り続ける人々を、史料整理のプロセスに組み込んでいないことが、要因の一つだろう。

在野のアーキビスト養成を目指して

以上のことから、棚原での文書整理は地域住民を在野のアーキビストに育て上げるプロセスと位置づけ、13人のパワーアップ委員全員参加を基本とし、毎回ほぼ全員が参加した。２、３人のチームに分け、博士後期課程以降の史料調査経験者をリーダに据え、共同で目録を作成した。古文書の解読能力のある院生や教員、研究員が読んで内容を説明し、住民の委員がカードに筆記するという方法で作業した。次第に慣れてくると、住民同士でチームを組んで作業し、教員などが耳をそばだてながら近くで単独で作業をする方法も採った。これ以外に、兵庫県布達の目録作成は古文書を読めなくても可能との判断で、６月24日にはパワーアップ委員13人だけで目録取りを行った。

また、震災の際の歴史資料ネットワークによる史料救出活動が縁で始まった宝塚の古文書を読む会の世話人で、丹波・市島出身の芦田迪子さんも毎回参加している。

合同調査の日程と大学側の参加人数は、以下の通りである。

第１回（06年2月8日）坂江・大国・松下（3人）
第２回（3月13日）坂江・大国・松下・樋口・正木・内田（6人）
第３回（4月23日）坂江・大国・石川・松下（4人）
第４回（7月30日）坂江・大国・石川・松下・内田・前田・森本（7人）
第５回（10月5日）坂江・大国・石川・松下・河野・内田（6人）
第６回（11月11日）坂江・大国・松下・河野（4人）
第７回（07年3月4、5日）坂江・大国・石川・木村・松下・河野・正木（7人）

庚申堂の区有文書に加えて、観音堂にあった古文書は、６回の合同調査と１回の住民単独調査で、約900件、計1000点の目録を取り終えた。第７回目の合同調査は、それまでの目録の原本と照合を泊まりがけで行い、こちらも一部を残して概ね終了した。

研究者だけで目録を取る作業に比べると作業効率が悪いのは否めないが、これからも史料保存の担い手になる地域の住民との合同作業は、大地にしっかりと根を下ろしているようで、手応えがあった。また土地鑑もなく人名、屋号、家筋にも基礎知識がない我々にとって、地域の様々な役職を兼ねた集団であるパワーアップ委員は力強い生き字引である。史料の中に出てくる人名同士の関連が判明し、現在の状況と結びついた説明を聞くと、史料が急に立体的に見えてくる。

史料は1624（寛永4）年から1920（大正9）年までのもので、年貢免定などや亀山藩の触、検地帳や名寄帳、野村と共同で利用している大井堰関係資料、長谷村との境界争論史料、京都・明暗寺の虚無僧留場関係資料などから明治の兵庫県布達や神社の由緒、瑞巌庵関係資料などである。ただ宗門改帳などはほとんどなく、庄屋文書としては不完全である。散逸したかあるいはまだどこかに残っているのか、継続調査が今後の課題である。

整理の済んだ古文書は、何点かずつまとめて大学が提供した中性紙の封筒と中性紙の文書箱に入れて引き続き地元で保存している。

目録カードは毎回、パワーアップ委員の三宅敏男さんに渡し、エクセルに入力してもらった。また三宅さんが順次デジカメに撮影し、目録と照合できるようにしている。

目録は点検が終了した段階で、第１版として仮製本する予定である。また、成果と保存の意義を訴えたわかりやすいＡ４版４ページのパンフレットを作成（巻末184頁に参考資料として収載）、３月24日から地区で全戸に順次配布した。

古文書を読む会の開催

調査と並んで手がけたのが古文書を読む会である。古文書は読めないから捨てられる、読めないから地域の歴史が伝えられない－。史料ネットでの歴史資料を大事にする社会づくりに取り組むなかで痛感し、宝塚で続けている古文書を読む会の実践と積み重ねをこの地でも出来ないかと思った。パワーアップ委員も同じ思いで、古文書を読む会は３回開催した。2006年７月30日53人、11月11日43人、2007年3月4日38人で、初年度は、年貢免定を取り上げた。対象は地域以外にも広げたと

ころ、棚原の古文書と限定しているにも関わらず、ほぼ半数が地区外からの参加で、古文書に関心があっても必ずしも学習の機会が多くないことを実感した。

このため出来るだけ基本的な事柄から話すことを基本に据え、単に文字面を読むことに終始せず、そこから読みとれる地域の姿をできるだけ具体的に語ることに重点を置いた。史料を守ることが地域の姿を後世に伝えることになることを実感してほしいからであり、文字を読むことだけを目的としたものではなく、地域の過去と現在、未来を考える素材にして欲しいと切望したからである。

草の根文書館への夢と今後の課題

とりあえず順調にスタートし、一定の成果をみた古文書調査と、古文書を読む会だが、まだ始まったばかりで課題は多い。思いつくまま記しておこう。

まず保管場所。現時点では庚申堂の建物が古く、湿気などが不安である。定期的な虫干しなど、まさにアーキビストの基本作業が今後も必要になってくる。できれば公民館の建て替えなどに史料保管庫—いわば草の根文書館—を作れないか。余分な費用がかかるかもしれないが、それが必要だという共通認識を地域や行政に育みたい。

調査が済んだのは庚申堂と観音堂の史料だけで、棚原区にはまだほかにも文書所有者があり、地域全体を視野に入れた継続調査が必要である。さらにこれから地域で産み続ける公的な文書の受け入れはどうか。そこまでできると、「みずから生んだ文書」を「みずから保存する」ということになり、本当の意味での草の根文書館になるのだが、現代の文書もとなると、共通認識はまだなく、すべてこれからである。

また在野のアーキビストの養成として位置づけた史料整理作業で、現在の13人の委員には最低限のノウハウは伝わったと思う。だが、地元の委員会もどのように存続できるか、問題があるだろう。委員は年輩者ばかりで、継続のためには新たな担い手を確保していく必要があり、できるだけ若い層へのアピールを狙った。「元禄の絵図を歩く会」の提案を行ったのも、ハイキング感覚であれば子供たちとその親という巻き込み方が可能だと考えた。しかし11月の当日はあいにくの雨で思ったほどの参加者はなかった。前年のハイキングには100人近い参加があったというから天候が恨めしく思われた。ただかりにハイキングに参加してもらえたからといって、新たな在野のアーキビストになってもらえるかは別問題である。

それでも団塊の世代の大量退職が始まろうとしている。事実パワーアップの事務局長の上田脩さんも、パソコンやデジカメを駆使し実務を担う三宅敏男さんもリタイアしたUターン組である。2人のUターンコンビがいなければ、ここまで短期間でこれほどの成果は生まなかったに違いない。それだけにこれからのリタイア組を継続的に組み込んでいく発想が必要だろう。

若い層へのアピールを狙い、年度末に作成したパンフレット（巻末に参考資料として収載）は中・高校生でも読んで理解できる内容にしようと試みた。中学・高校の日本史の教科書に使われている歴史用語を確認し、「庄屋」や「年貢」など常識的な歴史用語も補足説明を加えながら平易な文章を試みた。思えば、史料館などの展示を除けば、歴史資料から読みとれた新しい成果の報告を、中学生を意識して執筆したのは初めてだった。しかし要は関心を持ってもらえるかどうかであり、おもしろくなければ、どれほど平易に書いたとしても読んでもらえないのは自明の理である。どれほど読まれ、試みがどれほど伝わったのか、評価はすべてこれからである。

パワーアップと大学を結びつけたのは丹波市教委であり、行事のたびに教育委員会の係長らが参加し行政との関係は良好である。ただ行政も多くの課題を抱えている。合併で対象地域は広くなったのに職員は削減される傾向にある。地域にあった資料館も無人化が進み、歴史を身近にする取り組みは次第に困難を抱えつつある。そのなかで丹波市は2007年度から旧6町の悉皆調査を行う。1年で旧1町全部を調査するという調査である。とても行政や調査委託をうけた研究者だけでは表面的な調査しかできないだろう。表面的な分布調査では後になって利用ができない。後々の財産にまで高めるには住民の力が不可欠である。棚原での経験がほかの地域にどう波及できるか、今度は先行調査の事例地区として、ノウハウを他の地域にも伝えることが求められる。

しかしマンパワーの問題は、地域や行政以上に大学側は深刻である。古文書を読める調査経験豊

富な院生はあまり多くなく、各地との地域連携でメンバーの作業は錯綜している。単発の事業を興すことはたやすいが継続は難しい。地域の新たな担い手の発掘を続け、仮に後継者が登場したとして、その人へのノウハウの提供は大学としてどこまで継続できるのか。あるいは住民による在野のアーキビストに再生産の機能が盛り込むことは可能なのか。可能だとしたら大学はどんな後押しができるのか。逆に不可能ならどうしたらいいのか。まだすべてが暗中模索と言わざるをえない。

古文書を読む会も年３回程度では、なかなか読解力は向上しない。しかし距離も遠く、回数を増やすのは困難をつきまとう。古文書を読む会には周辺の住民で、古文書にも詳しい方の参加があった。地域のなかで古文書に詳しい人を巻き込み運動の輪を広げられないか。

ネットワーク化への期待

アーカイブの思想の普及と歴史を学ぶ意義に共通認識を持つ地域と大学のネットワーク化がますます重要になってきている。その芽生えはある。第７回目の調査では、朝来市生野の古文書を読む会のメンバーや旧氷上町の前町長が棚原を訪れ、住民による文書整理を見学した。また地域の子供たちを巻き込んだ調査と展示を進めている小野市好古館へはパワーアップ委員が出かけ、成果を学んだ。地元進修小学校との連携模索も始まり、新たな可能性が広がっている。成功例に学び、失敗の教訓を生かしあうことが、大学が関わることで可能になってきている。これらを大きく育てていくことが重要である。

今後も人と人をつなぐことを地道に進めることしか解決方法はないし、それが最も近道だろう。

（文責・大国正美）